

# 向井潤吉の素描



写実・描線の魅力

平成12年4月1日(土) - 6月25日(日)

開館時間：午前10時 - 午後6時（入館は5時30分まで）  
休館日：毎週月曜日（ただし祝日と重なった場合は翌日）  
観覧料：一般200円(160円)、大高生150円(120円)、中小生100円(80円)、  
65歳以上及び障害者の方100円(80円)（ ）内は20名以上の団体料金

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1  
TEL.03-5450-9581 FAX.03-5450-9583







《六十里街道にて》 昭和40-50年



《鶴の来る村》 年代不詳



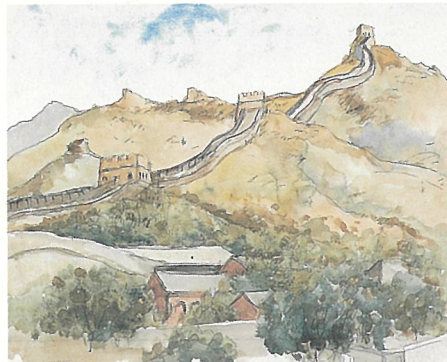
《晩夏》 年代不詳



《不詳(煙草を吸う農夫)》 1955年頃

# 向井潤吉の素描

## 写実・描線の魅力



《八達嶺望見》 1966年頃



《石仏-6》 1966年頃

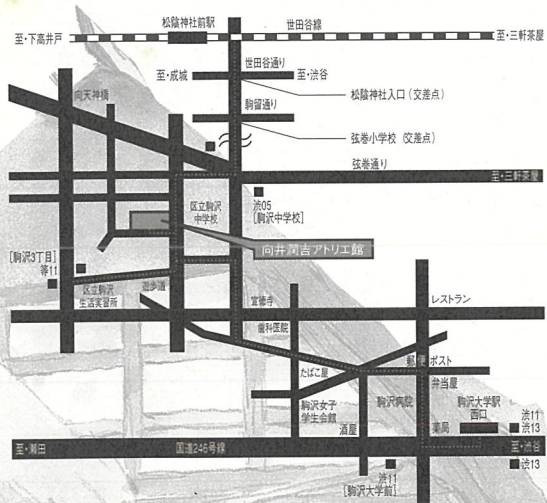
このたびの展覧会では、戦後より一貫して民家を描き続けた画家・向井潤吉先生の素描作品をご紹介します。

向井先生は1901年(明治34)、京都・下京区に生まれました。幼い頃より、絵を描くこと、ものを作ることに興味を抱いていた先生は、やがて“油絵”に強い関心を持つようになります。13歳で京都市立美術工芸学校の予科に学び、その後、15歳の頃から約4年間にわたって、関西美術院に籍をおき、本格的に油絵を学ぶようになります。

関西美術院では、伊藤快彦、沢部清五郎、都鳥英喜らの指導を受け、創設者の浅井忠、鹿子木孟郎以来の伝統となっていた几帳面で厳密な素描を徹底して学んでいます。向井先生の画家としての礎石は、写実表現を探索していくために不可欠である、素描力を養うことによって築かれていきました。さらに上京後、川端画学校に通い勉学を重ね、1927年(昭和2)にはパリに渡っています。

パリでの生活は、日中、ルーヴル美術館で古典名画の模写に専念し、長い西洋美術の伝統と本質に対峙しつつ、さまざまな表現と色彩、また画材に関する研究を行っています。そしてアトリエに戻ってからは、パリの街に生きる人々を主なモチーフに選び、フォーヴィスムを想起させるような、荒々しく思うがままの筆触での制作を重ねました。夕刻から夜にかけては、連日のようにアカデミー・ド・ラ・グランド・ショミエールに通い、裸婦のクロッキーに紙数を重ねていきます。5分間で次々にポーズをかえていくモデルの姿を的確な描線で追いかけ、均整よく紙面の中に収めていく習練は、短時間で対象をとらえる、画家としての確かな目と、端的な描写力を培うことになりました。こうした習練の積み重ねは、後年に向井先生が民家作品を制作するために、つねに民家の前にイーゼルを立てて作品を描きあげていく“現場主義”を貫いていく上で、大いに役立っていると思われます。

どのような時も描こうとするモチーフを前にし、そのモチーフが放つもの、醸し出すものまでも、向井先生は描線を駆使して描き出していたのです。目に映るモチーフの本質を鋭く掴みだし、描線を基本として成立していくそれぞれの作品は、ある意味で私たちに、その画家の画家としての本質を、たいへん明快な“かたち”として、示してくれているのだ、と言えるのではないのでしょうか。



### 交通機関

- 東急新玉川線 駒沢大学駅西口下車 徒歩10分
- 東急世田谷線 松陰神社前駅 下車 徒歩17分
- 東急バス(波05) 渋谷～弦巻営業所 駒沢中学校下車 徒歩 3分
- 東急バス(等11) 祖師谷折返所～等々力 駒沢3丁目下車 徒歩 3分
- 東急バス(波11) 渋谷～田園調布 駒沢大学駅前下車 徒歩10分
- 東急バス(波13) 渋谷～砧本村 駒沢大学駅前下車 徒歩10分

世田谷美術館分館

## 向井潤吉アトリエ館

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-5-1TEL.03-5450-9581 FAX.03-5450-9583